

アトリエ 琉游舎 だより 183号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年7月17日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

有縁無縁の精霊を思い感謝する日

お盆施餓鬼法要

8月11日（日）10時半から

●お盆は祖先の霊を供養する行事です。この期間には祖先の霊が子孫や家族の元に帰って来るとされ、盆踊り、精霊流し、迎え火、送り火などの様々な行事が営まれます。日本人古来の祖先への感謝と供養の気持ちが仏教の考えと融合し今も生活の中に定着しています。

●施餓鬼会は貪り苦しむ餓鬼に対し飲食を施し、先祖代々や広く無縁の諸精霊を供養する法要です。自分の命はすべての生命と繋がっていることを自覚し、自らの欲や貧りを反省するとともに生きとし生けるものすべてに感謝し思いを巡らす大切な法要です。

●琉游舎ではお盆と施餓鬼会を融合して「お盆施餓鬼法要」を行います。有縁（親や祖先）の精霊だけではなく、有縁・無縁を問わないすべての精霊への供養と回向の法要です。

●一年に一回、自分の近い故人や祖先に思いをめぐらし感謝し、また永遠の過去から永遠の未来までの、有縁無縁の精霊を思い感謝し供養する日にいたします。また受難、殉難、遭難、自然災害、人為災害、戦争、病没、公私問わず、有史以来亡くなられたすべての方へ供養・回向し、私達の安寧と生きとし生けるものの平和を祈念いたしたいと思えます。

●ただ祈念すれば何事も叶う訳ではありません。大切なことは神仏にお願いすることではなく、私たちが「願い、誓い、行う」ことです。家内安全息災延命などを願い、有無両縁の精霊の前で願いを誓い、日々の生活の中で願いのままに行うことが、私たちが法要を行う真の意味であり目的です。

7月・8月スケジュール

7月			木	金	土	日
			18 映画会 お休み	19	20	21
22	23 読書会 13時半から	24	25 映画会 お休み	26	27	28
29	30	31	8月1日 映画会 13時半から	2	3	4 写経会 13時半から
5	6	7	8 映画会 お休み	9	10	11 お盆施餓鬼法要 10時半
12	13 読書会 13時半から	14	15 映画会 お休み	16	17	18

読書会

7/23・8/13
(火) 13時半

写経会

8/4
13時半

映画会

8/1
(木) 13時半

狂言綺語…わかっちゃいるけどやめられない

この時期になるとすでに数度は蛇に遭遇しているはずなのですが、今年是一回もお目にかかってはおりません。雑木林から溜池に向かう途中で車に轢かれてペしゃんこになった蛇の亡骸も、藪の中から聞こえるがさごそという音と伴に現れる蛇の姿におびえることも今年は一度もありません。いつもなら蛇が出始める5月中頃からは猛烈な暑さが続いたので、蛇の生態に何らかの影響が出たのか、あるいは今年はずでに三頭ほど罠に捕らえられている猪や、思ったほど痩せずには我が物顔で庭を歩き回っている野良猫の食料になってしまったのかと、蛇を見かけないなら見かけないで今年はどうなっているのだろうと思わずにはいられません。

地球温暖化と言われて久しく時が経ちましたが、かけ声もむなしく年々夏の猛暑は増すばかりです。全世界を挙げて取り組んでいる地球温暖化対策（温室効果ガス削減）が効果を発揮するにはまだ時を要するのか、かけ声倒れに終わり実効が乏しい対策なのか、かけ声だけで実行しない国があるのか、どれが理由か分かりませんが、本当に温室効果ガスを削減することが唯一の対策なのかと疑問を呈する声は聞こえてきません。地球も生き物ですから風邪を引くこともあるし、活動的になれば地球温も上がることもあるでしょう。かつて氷河期があったことを思い起こせばいずれ温暖期が来ることも自然の流れかも知れません。地球も生き物と観ること、それは地球そのものの存在とそこに寄生寄住する人間と伴に森羅万象も含めて観ていくことです。地球がこの宇宙に存在して以来、人が寄生した期間はほんのわずかな時間です。しかもその期間の経緯を記録として遡れる時間はせいぜい数千年もないでしょう。まして科学によってあらゆる事象が解明できると人間が考えそれを実証出来たと主張し始めた期間は、私見ですがルネッサンス或いは宗教改革を経てから以降のように思います。地球生命からすると芥子粒のような時間しか存在していない人間が、地球生命について全て分かったような顔をして地球の命を救う必要がある、そのための今ある唯一の方法は温室効果ガスの削減だと本気で信じているなら、人間とはなんと身勝手でお目出度い存在だと思わずにはいられません。

唐突に聞こえるかも知れませんが、お釈迦様が森羅万象をありのままに観て（空）そのままに歩む（行）歩き方にふさわしいと私が考える、子供の頃によく耳にした二つの歌をご紹介します。有名な歌なのでご存じの方も多いと思います。ドリスデイのオリジナルで日本語訳でもペギー葉山が歌っていた「ケセラセラ（Que Será, Será）」と植木等が歌った「スーダラ節」です。「ケセラセラ」は「なるようになるさ」と和訳されるスペイン語です。なんと投げやりな歌詞とも思いますが、あれこれと気に病んでも仕方がないじゃないか、だから成り行き任せで、前向きに今を受け入れようという超楽天的なニュアンスもまた感じられる歌詞の世界は、当時の私の単純な子供心には複雑な大人心として理解できなかつたに違いありません。もっと分からない歌詞は植木等の歌う「わかっちゃいるけどやめられない」のフレーズです。何も分かっていない子供には分かるはずもないのですが、それが良くないこと悪いことと分かっているならばやってはいけませんと躡られ教育されながら大人になっていくとの考えに素直に従って親や先生の意見を受け入れてきた私たち子供が、いきなり「わかっちゃいるけどやめられない」と大人に開き直られてしまったら混乱の極みです。しかしその感想も大人になった私が子供時分は恐らくそう感じたんだろうとの感慨に過ぎないでしょう。

今ならこの二つの歌が私の子供心の何を揺さぶり記憶にとどめさせたかがよく分かります。それは私たち大人が（少なくとも私が）「なるようになるさ」と「わかっちゃいるけどやめられない」の繰り返しで今まで生きてきたからです。歌詞を殊更に抹香臭く分析することは本意ではないので、結論だけ申し上げます。「ケセラセラ」はありのままに観てありのままに歩む（行）実践の言葉です。「なるようになるさ」は現状への諦め（ありのままの認識）です。そこで立ち止まり引き返し怒り悲しんでも、ありのままの今は変わりません。なぜなら諸法無我、因縁縁起によって今があるからです。だからなるようになる今この瞬間を更新続けて歩み続けることが「安らぎの処」へと向かっていること（生の実感）なのです。「わかっちゃいるけどやめられない」は植木等の言葉を借りると、彼の父上は浄土真宗の僧侶で戦時中は戦争反対や部落解放運動の言動で何年も拘束されていた宗教実践者でした。植木本人も無責任男のイメージで売り出しましたが実は厳格な父の教えを受け継ぎ謹厳実直な人柄でした。ところが会社の事情で意に沿わない「スーダラ節」を唄うことになり、父上が息子がこんな不道德な歌を唄うことを許してくれるだろうかと事前に父上に歌ってみせたそうです。すると「『わかっちゃいるけどやめられない』は人間の矛盾をついた真理で、これこそ親鸞聖人の教えなのだ。そういうものを人類の真理というんだ。上出来だ。がんばってこい！」と励まされたのです。父上の言葉通り「スーダラ節」は大ヒットしました。理由は明白です。表層的で軽薄に見える歌詞を総括する「わかっちゃいるけどやめられない」との言葉に、人々は自分たちの弱点として自覚しながらも、それが人が生きていくことなんだとの生きる「真理」に共感したからなのです。言うまでもなく親鸞聖人の「罪惡深重・煩惱熾盛の凡夫の自覚」の言葉が「わかっちゃいるけどやめられない」の歌詞に体現されたのです。仏の教えは難解な言葉や僧侶や宗教学者の独占物ではありません。私たちの生活の中にある何気なくも何か心を揺さぶる言葉の中にあるはずなのです。なぜなら仏の道は私たちの生きることそのものだからです。梅雨は明けたのかと思われる猛暑が何日も続きましたが、ここのところ梅雨空が復活し、蛇もしばしの暑さからの避難で力を蓄えて梅雨明けには元気な姿を見せるかも知れません。これも「ケセラセラ」です。地球温暖化対策もどんな効果があるかわからないけれど「わかっちゃいるけどやめられない」のかもしれない。でもその自覚が生きることならばこれも「わかっちゃいるけどやめられない」ことなのでしょう。